

NPO の活動で見た自分自身と地域のこれから

社会福祉学部 社会福祉学科 2年
地域福祉コース 山崎ゼミ
住田涼斗

① 自分の成長と気づきについて

福祉に携わるにあたり、援助者はあらゆる課題を持つ人々に対する支援をするうえで、何が必要なのか。活動をする前の自分にとっては、一年で学んだ講義の知識だけでは、漠然としていて、想像することができなかつたのである。そういった悩みがあって、地域福祉コースのサービ斯拉ーニング活動に興味を持った。実際の福祉の現場で働く人々を見ることで、自分の悩みが解決すると思ったためである。

夏休みで訪れた NPO は「もやい」と呼ばれる法人で、小規模ながらもやれることを地道に行うところであった。もやいの活動の理念は、助け合いの輪を拡げ、やがて迎える「老い」を豊かなものにし、誰もが安心して「子ども」を生み育てられる地域づくりを目指しており、小回りが利く、ボランティア精神をもった会であり続けている。その理念の下で、私は様々な事業に携わった。在宅支援事業で利用者のご自宅でのお手伝いや寄り合い所での利用者との交流などを通して、地域で根ざす NPO の活動の内容と課題、援助者に必要なことが何なのかを学ぶことができたのである。

サービ斯拉ーニングでの活動で、現場で活動する援助者に必要な心構えについて理解することができたのである。援助者は、あらゆる福祉的課題を持つ人々に対して、その支援の充実性の追求と、法や制度で縛られない多様な支援を実行することの必要性、そして、支援するにあたって、自分自身の支援のその後の展望などをしっかりと把握しておくことが重要であることを学んだのである。福祉職に携わるうえで、現場でしかわからない援助者に必要な支援のあり様を学び、それまでの講義ではわからなかつた、現場での職員と利用者との関係性を見て、コミュニケーション技術の必要性についてもまた、重要であることがわかつた。活動では、あまり職員と利用者とのコミュニケーションがままならず、自分自身の行動が、どのような結末になるのかを考えることができなかつたのである。こういった失敗を次の実習では、繰り返さないように心掛けることもまた学んだのである。

また、NPO と地域に点在する様々な社会資源との結びつきの重要性について知ることができたのである。事業をするにあたり、法や制度といった公的な社会資源を背景として、市民や NPO などの私的な社会資源を活用することにより、利用者には十分な支援を行うことができることわかつた。地域にある社会資源を援助者は、どのようにして結びつけて支援に繋げていくのかを考えていなければ、より良い支援をすることはできないのだろう。

② 活動を通して見えてきた現状と課題について

NPO での活動から見えた課題について、小規模で活動する NPO の限界を知ることができたのである。NPO で働く人々は高齢化しており、働き手の不足に悩んでいる。高齢化社会において、これから地域社会で問題を抱える人々が増加する一方で、こういった NPO の現状は、深刻な問題である。これからの NPO に必要な活動は、地域住民一人ひとりが地域の

福祉ニーズを考えていける機会を増やすことが重要である。住民が他人だからといって、地域の課題に見向きするのではなく、お互いが助けあう精神を身に着けていかなければならないのである。NPOが率先して、地域での福祉ニーズについて把握して、住民に説明する環境を整えて、事業に参加してもらうことがこれからの地域社会で必要になってくるのである。また、これらをバックアップする体制を構築することも大切である。昨今では、社会保障費の不足等により、政府が行ってきた事業を、地域に任せる流れが生じている。こういった流れのためか、NPOの経営がひっ迫している。このことから、NPO法人の年収は、同規模の民間企業と比べて低く、若い人材が魅力と感じないことが考えられるのである。政府や行政による福祉供給の万全な体制を見直すこともまた必要である。それにより、フォーマルな社会資源を利用者は活用することができ、よりよい援助をする担い手が確保することができる。

1年の成果 SLや研究を通して 高齢や地域をより深く知る

社会福祉学部 社会福祉学科 2年
地域福祉コース 山崎ゼミ
永井芳樹

① 成長と気づき

私はサービスマーケティングの活動を通して高齢者や障害者がどのような施設を利用していたり、どのような制度を利用しているのか理解することができたと思えた。なぜならサービスマーケティングで「もやい」という施設で6日間体験させていただいたところ訪問介護では利用者それぞれの自宅へ行き、利用者一人ひとりにあつた支援を行い、その人の性格や病状などの進行度に合わせてプランを考えていく。そのため部屋の掃除、整頓などは利用者ができるときには利用者にもやらせ、できないことをこちら側が行っている。利用者の機能の低下を防止、抑制をして機能の維持を行っていることを知ることができた。また、ミニデイでは高齢者の方や認知症を患った方に対してレクリエーションをやらしていただく機会をいただき、私は間違い探しやしりとりなどを行ったのである。間違い探しを行った際に目が見にくい人にたいしては問題の意図があまりうまく理解できなかったため、あまり楽しくない思いをさせてしまったことがあつた。盲目の人には字ではなく形や点字にして手で触ったりして楽しめる方法があることを知ることができた。しりとりでは、認知症を患っている方と行っていたところ「ち」や「し」、「つ」や「す」などの発音が似ている単語があまりうまく相手に伝わらず時間がかかってしまうことが分かつた。その際の体験をもとに後期の授業から研究のテーマにして認知症について理解を深めていくことができたと思われる。研究では認知症を調べていく中で高齢者との会話の仕方や若年性認知症についてなどわからなかつたことや誤認していた情報を修正していくことができた。高齢者と会話をしていくにあつて、高齢者のことをしっかりと尊重して相手の発言を否定したりしてはいけないことを知ることができたと思つた。また、認知症を患っている方は何回も同じことを言うてくることあるが、毎回初めてきいたふうに対応して「それ、前も聞きましたよ」などとは絶対に言うてはいけないことを知り、来年度の実習ではへまを起ささないようにしていこうと考えている。また研究での発表会の際に急遽発表時間の短縮を言われたさいに、うまくいかなかつたため事前に発表練習とトラブル時の対応などを考慮しておく必要があつたと思つた。一年を通して高齢者とかかわる際に注意することや大切なことについて学ぶことができたと思つた。

② 地域の課題

私は地域で何か活動を行つていく際には地域の人とのつながりが必要だと思つた。なぜならつながりがないとその人がどういった人なのか知ることができず、その人が困つても誰も助けることができず亡くなつてしまうことがあると思つた。そういったことはよく、ニュースなどで取り上げられ問題になっていると思つた。また、待機児童問題においても、施設の数が少ないと言つている人がいますが、施設を建てるのにも近隣の人が反対しており建てることができないでいる。そのため「保育園落ちた日本死ね」と言つているが、日本ではなくそこに暮らす人間関係が問題であると思つた。なので、近隣の人たちのつ

ながりがあると困っている人を助けるために動いてくれるかもしれないと思った。地震大国の国である我々は、しっかりと近隣の人と交流を行って助け合いを行っていくことが、今を生きる私たちにとって必要であると思った。そのためにも私たちは、地域に出て地域について学んで自分たちの暮らしている土地では、何が問題なのかを理解していくことが大切であると思った。自分の暮らしている地域に障害者施設がありその施設では毎年お祭りを開催しており、障害者がどういった人たちなのかを知る機会があるのだが、こういった活動が全国で行われていくことで、障害者がどういった人たちなのか理解でき、ニュースで障害者の悪い面ばかりが浮き彫りになっているこの社会を改善していけるのではないのかと思った。なので、私は地域ではもっと交流を行っていくことが必要であると思ったのであり、改善していくためにも活動を支えていくための国からの補助金などがいると思った。

私という人物と地域に大切な物

社会福祉学部 社会福祉学科 2年
地域福祉コース 山崎ゼミ
山上嵩人

① ゼミで成長したことと気付いたこと

私が、山崎ゼミでの活動を通して成長したことは、私は、基本みんなの前に立って話すのが苦手で、皆に何かを頼むといったことが苦手であった。さらには、なるべく後ろの方で、皆の意見に合わせるといったことの方が、私らしいと思っていた。だが、このゼミで私は、ゼミ長という立場をやらせて頂いたことで、私は、以前よりも人の前で話すということができるようになったように感じるようになった。気付いたこととしては、私は、リーダーとしては向いていない人なのだと気付くことが出来た。なぜそう感じたのかというと、チームで発表することに対しての作業がこの事実気付くことのできたきっかけである。私は、チームで一つのことに取り組むということに対して、基本的に自ら積極的にいろいろと動いていたのだが、その行動によって、チームは基本的に発表資料を作ることを私に任せていたということになってしまった。現に、合同発表のパワーポイントの7割は、チームで作ったというより、私だけが作っていたということがある。担当の先生から、何もしてない人をどうにかして働かせるようにと言われたが、私は、どうすればチームが動くのか考えた末、パワーポイントに各自の感想を書くといった項目を作ることにしたが、これでは、チームで協力して一つのことに取り組むというより、個人がバラバラで作ったものを一つにしたといった方が適切だと感じている。チームの中でも、手伝ってくれる人はいたが、基本的に動かない人は、リーダーが指示を出さなければならないのかも知れないとチーム発表で感じた。だが、私は、チームのメンバーに指示を出すことが出来ないだけでなく、基本的に面倒なことは自分でやるということなので、結果として、チームのリーダーとして機能できる人材ではないのだと感じた。また、自分は、リーダーというよりも、前に出て動くことのできる人間なのかも知れないと感じたので、その強みを3年次でのゼミで生かせるようにしていきたいと思った。

② 活動を通して私が地域に大切だと感じたこと（繋がり）

山崎ゼミでの活動や、特定非営利活動法人もやいで活動で地域や市民活動に大切だと感じたことは、繋がりを大事にしていくことではないのかと私は思った。なぜなら、山崎ゼミでは、個人で何かをするというよりも、チームに分けて複数の人間と力を合わせて何か一つのことに取り組んでいくといった活動を中心に行っているように感じた。現に、ゼミでの発表2回ともチームで行っていただけでなく、2回目は、最初のメンバーと違ったメンバーで発表をしていた。これは、チームで行うことで他者との繋がりを少しでも大切だということを学ばせようとしていたことで、2回目の発表は違ったメンバーと活動を進めたゼミでの方針は、少しでも違った人と関わることで、自分が全く知らない人ともコミュニケーションを図ることを目的としており、その結果、他人とのコミュニケーションをすることが可能となることの練習なのではないのかと感じた。つまりは、他人との繋がりをこのゼミでは意識

していると思った。それは、特定非営利活動法人もやいが行っている、ガーゼ染めやマージャン大会などの活動には、地域の方々の交流を目的としているということだった。つまり、地域と施設を繋げていくためにしている活動だということではないのかと思った。また、訪問介護を受けている利用者の方や、サービスを受けている利用者の方と、施設の方の関係は、私たち学生よりも、とても深いものだった。施設の方は、その道で仕事をしているのだから、私たちより当然利用者の方と絆が強いのだと思うが、そこにある絆ということが、大事なことなのではないのかと思った。なぜなら、利用者の方と施設の方が、多くの時間繋がっていたからこそ両者に絆が出てきたのではないのかと思う。ここにも、繋がりということが鍵となっていると私は思う。仮に、ここに繋がりが無ければ、利用者の方と施設の方に絆が無いのではないのかと思う。これは、施設だけでなく、私たちの大学でも、学生同士の繋がりが存在している。さらには、地域に住む方々には、誰かと繋がりがあるのだと思う。つまりは、繋がりというのは、私たち市民にとって生活をよりよくしていくためにあるのではないのかと私は感じた。なので私は、地域をよりよくしていくには、なにかと繋がることのできるような場所等を作っていくことではないのかと思った。